

version d'évaluation

このファイルは P.P.Content Corp. 社刊行書籍のトライアル版です。このファイルは、読者が当社刊行図書の購読を検討する場合に限ってのみ利用できます。一般に広く無料で公開されているわけではありません。このファイルおよびこのファイルに入力されている電子的データの著作権は、著者ならびに当社に帰属します。あなたがこのファイルを第三者に提供すること、公開すること、頒布することは禁じられています。

A D E L E

Callas Cenquei Femmes #1 Adele / Edition de Librairie P.P.Content Corp.

Callas Cinq Femmes #1 Adele / l'Histoire d'Amour Maudit

海辺にひびく鳥の声を美しい

と思った。頬を撫でて行き過ぎる潮のかおりをいとおいしいとわたしは思った。もう二度とパリに戻ることはないかもしれないというわたしたち家族の深い絶望の色で瞳に映るものすべては暗く沈んでおり、また夜ともなればいつも父を苦しめる亡姉レオポルデーヌの痛ましい記憶にわたしたち家族の思い出は逃れようもなく囚われており、わたしたちは、パリを遠く離れた小さな島の小さな街で息をひそめるように深い喪のただなかにいた。しかし、海辺にひびく海鳥の声が美しいとわたしは思った。頬を撫でてゆく潮のかおりがいとおいしいとわたしは思っ

た。肌にふれる海のひびきがわたしの鼓動を高鳴らせる。とわたしは思った。そしてここ、ガンジーの浜辺でエニシダを挿した食卓の花瓶や静かに揺れるお父さまの椅子、その背もたれの縁に手を差し伸べて優しく微笑むお母さまの美しい横顔、もはや年老いて耳の遠くなったばあやがわたしを気づかって差し出してくれる洋梨のデザート、そのように取り止めもなくわたしの瞳に映るものすべてが、海辺にせまる夕暮れの深い静寂のなかで、もはや決して繰り返されることはないであろう一刻一刻の美しい輝きをおびてわたしの眼の前に立ち現われたその瞬間、わたしは、わたしが恋に落ちていることを確信しました。

わたしはこの地に来たことを後悔している
のだろうか。誰にも告げず、父にも告げず、このアリフ
アクスの地に来たことをわたしは後悔しているのだろうか。
この抑えきれぬ心の不安な動揺はわたしの恋に対する
深い懐疑の現れなのだろうか。それとも恋というものが
もたらす自然な心の揺れ動きなのだろうか。もしかす
るとわたしは知っているのかもしれない。この恋の行方
を本当はわたしは知っているのかもしれない。恋に落ち
て感受性をますわたしの心が、わたしの恋の不穏な天候
を予告して、あたかも危険を告げ知らせる百葉箱のなか
の気圧計のように、過敏に揺れ動いているのかもしれな

い。思い起こせば、わたしの恋は喪のかたわらにあつた。
もはや決して明けることはないであろう漆黒の喪のかた
わらに、わたしの恋はあつた。わたしはわたしの暗い部
屋のなかで、光を求めるように恋を求めた。光を求めて
添え木に蔓をからませる葡萄のように、わたしはこの喪
のなかで恋を求めた。ああおと枝葉をひろげてゆく樹
木がするようにわたしは光を求めた。若くして亡くなつ
たお姉さまの拭いがたい喪の記憶のなかでわたしはアル
ベールに恋をした。ルイ・ボナパルトがお父さまを辺境
の地に追放して以来、祖国に取り憑いて離れない深い沈
潜と停滞の喪のなかで、わたしはアルベールに恋をした。

お父さま。どうぞわたしの恋を
ブリュメール十八日の夏休みなどとはおっしゃらないで
ください。お父さま、どうぞあの方をあのいかがわしい
ボナパルトになぞらえることなどなさらないでください。
あの方は、アルベールさまは、いつもどこか不吉な誘惑
者の風貌を湛えてはいらっしやいますが、それは、あま
りにも感じやすい彼の素顔を隠すために、あの方が社会
的な信用の代わりに作り出した、あの方の仮面にすぎな
いのですから。お父さま、アデルには理解できるのです。
あの方の本質は感じやすさです。恋を知る者が恋を知る
者にのみ認められる感じやすさなのです。お父さま、恋

に落ちた娘の心は感じやすくなります。心の肌がとても
敏感になるのです。まるで感受性の強い物質が、光を受
けてその表面に刻一刻の光の痕跡をとどめるように、恋
に落ちた娘の心は、この世の光という光と交感しあつて、
感じやすい彼女の心に美しいイマージユを印しづけるの
です。まるでお父さま、恋をする者は、あのダゲールが
創り出した奇妙な箱のなかに匿われている多感な物質の
ように脆く、そして敏感なのです。彼らは、恋人たちの
暗い部屋のなかで、あまりにも感じやすい彼らの肌をひ
そかに重ねながら、彼らが見ている美しいイマージユを
おたがいの感じやすさのもとで静かに交換し合うのです。

アルベールを見た。アリファクスの吐息を凍らせる白い大気のもとでアルベールを見た。ロンドンの夜会で見知らぬ女と踊っているのを目撃して以来、わたしに取り憑いて離れなくなった恋の不穏な気象のもとで、わたしはアルベールを見た。軽やかな騎兵の装いで、手を振る群衆には一顧だに与えず、アリファクスの大通りを行進してゆく第七騎兵隊の顔立ちのなかに、わたしはアルベールの美貌を見た。アメリカに向かう船のなかでは毎夜の夢にも立ち現われ、瞳を閉じればわたしの心に美しい亡霊のように潜むイマージュが、眼にもさやかな啓示となって現われる瞬間をわたしは見た。わたしは

アルベールの名を呼んだかもしれない。子どもがするように大きく手を振って彼の名を叫んだかもしれない。街のはずれで彼らの後を追うことを断念したかもしれない。だが、わたしの夢が啓示となって現われる瞬間をわたしは見た。わたしはやがて、わたしの黄金を手にするだろう。一年が経ち、二年が経ち、ゆるやかに成熟してゆく時間のなかで、わたしはわたしの黄金を手にするだろう。今はまだお父さまが施してくれるパンの他には何も持たない若い娘が、四年後にはかならず彼女自身の黄金を手にするだろう。わたしは誓う。わたしの小さな神にわたしは誓う。かならずアデルは彼女の黄金を手に入れると。

若い娘の美貌は浜辺に打ち上げられた枯れ木のよ
うに刻々として衰えてゆくものなのだろうか。アメリカ
の人々はわたしにマダムと呼びかける。下宿屋の主人も
しばしばわたしに過ってマダムと呼びかけ、そのつど夫
人にたしなめられる。兵舎の官吏も暖房の効かない小部
屋にわたしを通すと、先ほどマダムと呼びかけたことの
非礼を詫び、しばらくここで待つようにとわたしに言っ
た。永遠と思われる時間をわたしは待った。二度目の啓
示が訪れる瞬間をわたしは待った。そして、扉の開く音
とともにわたしはアルベールの名を呼び、自分が恋する
人を追ってこの地にまでやって来たことを慌しく話した。

信じられぬほどの時間を費やした航海のことをわたしは
話した。僻遠の地に追放されていつそう沈鬱の表情が増
してきたお父さまのことを、その父を気遣うあまり病に
臥せりがちな母のことを、ロンドンで過ごした日々のこ
とを、どうしてもわたしがおまえのことを忘れられない
ということ、わたしは話した。彼がわたしを抱きしめ
るであろう瞬間を予期しながらわたしは話した。わたし
を抱いて接吻するであろう瞬間を期待しながらわたしは
話した。しかしながら、あの方は、彼を慕ってはるばる
海を渡ってきた娘を、まるで厭わしい老婆か不吉な狂信
者でも見るような眼差しで眺め、わたしの恋を怖がった。

お父さま。アデルはいけない娘です。アデルはまた今宵もあれをしてしまいます。まだ若い娘が誰にも洩らさぬ甘い寝息を彼女の枕辺に吐いてしまうように、わたしはわたしの恋のゆくたてを、わたしの愛の既往歴を、この紙くずのうえに書き散らしてしまいます。不順な体温や不整な脈拍、まるでその日の病状の進行をながながと書きとめる病床の人のように、わたしはわたしの恋の履歴を紙のうえに書き散らしてしまうのです。お父さま、アデルは紙くずの亡霊です。まるで感光性の良い物質が、光を受けて刻々の印象を精確に印しづけるように、恋をして感じやすくなったわたしの心が、愛の光に

照らされて、しばしば明るみをましたり翳りをましたりするわたしの恋の美しい模様を、紙のうえに正確に記しづけるのです。お父さまに黙って家を出たことのお詫びは、船からの便りでよくよく申しあげましたが、アデルはようやく懸案の地に到着いたしました。ピンソン中尉が逗留する兵舎から少し離れた市街の一隅に居を構えています。お父さま、どうぞご心配なさらなくてください。わたしは幸せです。ピンソン中尉の愛に包まれてアデルはとても幸福です。それから、ここではわたしはケイトという名を名乗っています。お手紙はケイト・アンダーソン宛てにお送りください。あなたの可愛い娘、アデル。

わたしは誓う。わたしの小さな神

にわたしは誓う。決してわたしの恋であの人を怖がらせはしまいと。決してわたしの愛の輝きであの人を驚かせはしまいと。わたしはよくよく考えて結論づけた。昨日の、一昨日の、いいえアリファクスに来てからこの十日というものの、アルベールさまがわたしに注ぐ眼差しは、決して厭わしいものを見る人の眼差しではなく、むしろ眩しいものを見る人の眼差しなのだ、と。あの方にはわたしに眩しいにちがいない。アルベールにはわたしの愛がまぶしすぎるのだ。恋におちた娘の美貌はその純真な光で見る人を驚かせる。まるで触れてはならない清らか

なアウラが、彼女の美貌の下から、虹のように立ち現われているのだ。それがあの人を怖がらせる。それがあの兵隊を臆病にさせている。夜が更けてもまだ永く続く夕暮れの光のなかでは、わたしの愛の輝きは強すぎるにちがいない。そうでなくとも気温の低いこの土地では、ものみなすべてが白い光に涵されて見える。正午を迎えてもまだ高く昇らないこの土地の太陽をわたしは愛さない。夜が更けてもまだ夕暮れが続くアリファクスの光をわたしは愛さない。夕暮れとは、美しい時に静止を呼びかけつつ、その呼びかけすらも押し流してゆく残酷な時の力のもとで、なお美しい一瞬を立ち上がらせる奇跡なのだ。

アドレセントな痛み。思春期のような痛み。わたしがみずから禁じた掟をわたし自身が守ること。わたしの恋はときどきわたしを物質的な妄想へとかりたてる。わたしの恋の不順な天候はしばしばわたしを物質的な妄想へと誘惑する。愁いを含んで貝殻のように咲くわたしの胸の小さな突起に、ここ数日アドレセントな痛みが取り憑いて離れない。まるで思春期のような痛みがわたしの乳房の尖に凍りついている。心なしかそのふくらみも重く、そして鈍い。わたしの指はわたしの過敏な部分に触れすぎる。わたしの指尖はわたしの敏感な部分をえらんで触る。そしてアリファクスの光のように美しい

夕景がしばらく続いたあと、わたしの悲しみが出血する。わたしの誓いをわたし自身が忘れないこと。わたしがみずから禁じた掟をわたし自身が守ること。夜になると明日こそは出かけようとわたしは思う。でもそう思いながら三日が過ぎた。理由をつけて明日こそは外出しよう、そう思いつつもまた三日が過ぎた。このあいだあの人がわたしに注いだ眼差しを考えると、外出することが恐ろしくなる。こうしているあいだにも刻一刻と老いてゆき、しかも、その老いがしだいに加速しているように思われてならない。特に友好的な微笑を浮かべるようにしよう。わたしはアデルではない。ケイト・アンダーソンなのだ。

お父さま。アデルは幸せです。アメリカの人はとても親切な方たちばかりです。厳しい自然と環境のなかで生活しているアメリカの人々は、異郷から来た娘に対してもたいへん優しく接してくれます。まるでアデルはこの土地では、年端も行かない娘のように扱われています。マ・シエリ、食事の前にはかならず手を洗いなさい。マ・シエリ、寝る前には必ずうがいをしなさい、今年は湿った風のせいで奇妙な病が流行していますから。わたしは嫉妬と猜疑にみちたパリの人々よりも、この土地の穏やかで素朴な人々を愛します。この美しい風土のせいでしょうか、わたしは日を追うことに若さを回復し

てゆくような気がします。肌がみずみずしくなり、表情が穏やかになり、アデルはアリファクスに来てから美しくなったとピンソン中尉も仰っています。しかし、パリのような楽しみが少ないことは残念です。この土地では各々の家庭で小さな夜会を催して、お世話になった方々や親しい人をもてなします。アデルもピンソン中尉とともにしばしば招かれ、彼らの可愛い娘のように手厚く歓迎されています。そろそろわたしもこの小さな夜会を催して、お世話になっている方々のお礼をしたいと思います。お父さま、異郷の娘が享けた歓待の返礼として三百フラン送っていただけるとありがたいのですが。アデル。

馬に乗って兵舎に帰るアルベールを見た。隊列を崩して三々五々兵舎の門を潜り抜けてゆく敵めしい顔立ちのなかで、アルベールの美貌は際立っていた。髭をたくわえた強壮な体躯の人のなかでアルベールのしなやかな美貌は際立っていた。この美しい男がわたしの愛しい人なのだと、このしなやかな美貌をわたしは何度も胸に抱いて、変わらぬ愛を誓ったのだと、馬車を操る馭者に告げ、この感動を共有したいとわたしは思った。わたしが持っている財宝のなかでもっとも晴れがましく、もっとも美しいものをこの世のすべての人に披露し、この財宝をわたしが所有していることの、この財宝をわたし

が独占していることの、しかしながらその輝きは誰彼なく頒ち合えることの、その悦びを伝えたいとわたしは思った。これなんです、このひとなんです、そう教えて廻りたい欲望にわたしは駆られた。でもこれでいいと思っただ。愛しい人の姿をわたしは瞳に焼き付けた。わたしはアルベールの姿をわたしの胸に焼き付けた。わたしが持っている内密のアルバムに一番新しい写真を一枚加えた。これでいいと思った。これで帰ろうと思った。今日はいつもより美しく化粧はしているけれども、アルベールを驚かせてはいけなないとわたしは思った。しかし、わたしの手は馬車の扉を開け、わたしは男の名前を呼んでいた。

アルベールさま。先日は失礼いたしました。突然の訪問でご迷惑をおかけしたかもしれません。さぞや驚きになられたことでしょう。しかしながら、アデルは一目だけでもあなたさまにお会いしたかったのだということ、いいえ、一目だけでもお会いしなければならなかったのだということ、どうしてもお伝えしておきたかったのです。もちろん、あなたさまには将来を約束した可愛い方がいらっしやることは存じております。実は、もうじきわたくしもお父さまの奨めでイタリアの豪商のもとへと嫁ぐことになります。お年を召してはいらっしやいます、とても素晴らしいお方です。花嫁になるま

えにせめてアデルはあなたさまにお会いしておきたかったのです。わたしたちの美しい愛の日々を思い出していただきたかったではありません。すこしわだかまりを残してお別れしたあなたさまとの恋の模様をきれいにしてから、花嫁になりました。九月になると仮縫いが始まるでしょう。十月になると宴の準備にあわただしくなるでしょう。それまでに一度だけあなたさまにお会いしたかったのです。来週にもわたしはロンドンへと向かう船上の人となるでしょう。もしよろしければ、それまでに一度だけお会いしていただけませんか。無理には言いません。アルバート・ピンソン中尉殿。アデル。

わたしはその胸にからだを押し付けるようにして言ったのだろうか。それとも額に瞳をさまよわせるようにして言うのだっただろうか。なぜあなたは、あなたに幸福をもたらす恋人よりもあなたに苦難を強いる新しい天地を選ぶのかと。なぜあなたはわたしよりも遠いアメリカの土地を選ぶのかと。それともあなたは、わたしたちが重ねて来た愛の日々をこのまま捨て去るつもりなのかと。わたしは言う。もしこのままあなたがここに留まってくれるのならば、わたしは、あなたがわたしにしてきた仕打ちを水に流してもいいと思う。いくつかのスキヤングラスな恋の振舞いも、若い男にありがちなこ

ととして水に流していいと思う。もしあなたがわたしの愛の振舞いを押し付けがましいと厭うていらっしやるのなら、これからわたしは、わたしの行いを慎もうと思う。わたしの愛であなたを苦しめるような真似はしまいと思う。だからと。どうしてもと。わたしは言う。行かないでくれと。このままわたしを残して行かないでくれと。この哀れな娘を彼女の暗い部屋に残したまま立ち去らないでくれと。これからわたしはどうすればいいのだ。あなたのいない時間をどのように過ごせばいいというのだ。あの人は言う。子どもを諭すように穏かな口調でわたしに言う。あなたはお父さまのところへ帰りなさいと。

馬車の扉が開き、突然アリファクスの白い光が溢れた。おまえの馬車を毎日この沿道に留めることをやめてほしいと男が言った。街角に潜んでわたしを驚かすこともやめてほしいと。何よりもおまえのお父さまを悲しませるような真似はしないでくれ、と。わたしは言う、眩しいから扉を閉めてくれと。無礼な真似はしないでくれと。男は言う。人目もはばからず街なかで愛を告白することもやめてほしい。人をあきれさせるようなまねはしないでくれと。わたしは言う、はやく扉を閉めてくれと。別にあなたを待ち伏せしていたわけではないと。アルベールは言う。帰る気もないくせに帰ると言っ

てありもしない作り話を吹聴したり、人を困らせるような虚言を吐くのはやめてくれと。わたしは言う、ただ会いたかったのだと。一目でいいから会いたかったのだと。むかしのようにおたがいの瞳を見つめあつてその肌に手を触れたかったのだ。わたしは言う。もう一度だけ抱いてくれと。もう一度だけでいいから口づけをしてくれと。一度だけでいいからと。もし債務の取り立てが厳しいのならば、わたしが立て替えてあげてもいいと。昇級で困っているのならば、お父さまに口を聞いて差し上げてもいいと。アルベールは言う。わたしの訴えを紙くずのように手に丸めてアルベールは言う。フランスへ帰れ、と。

あなたの好きなわたしの胸をさわらせてあげてもいいとわたしは言った。わたしの髪に手を触れてもいいとわたしは言った。おまえの愛したわたしの肌は今ならまだ口づけをしてもいいとわたしは言った。さもなくばあなたを呪うだろうと。わたしはあなたを呪うだろうと。わたしの愛であなたを呪うと。街角に潜んであなたの心臓をわたしは狙うと。北軍に打電しておまえの心臓を狙わせると。謎めいた街角に身をひそめてわたしの美貌でおまえの心臓をわたしは狙うと。おまえの好きないかがわしい絵の裏側に潜んで、わたしの美貌であなたの心臓をわたしは狙うと。わたしは言った。わたしは

言った。むかしわたしがあなたに贈ったハンカチーフを返してくれと。わたしの名前を刺繍した白いハンカチーフを返してくれと。わたしの胸には愛の思い出が、拭っても拭いきれない残像のように染み付いて取れないのだ。あなたの愛したわたしの肌には、美しい愛の記憶が、美しい愛のおもかげが、まるで暗殺者の心に染み付いた血糊のように染み付いて、どれほど擦っても取れないのだと。お願いだから、わたしの夜を悩ませないでくれと。まだ若い娘の枕辺に立つことだけはやめてくれと。わたしの夢の街かどに潜んでわたしに愛を語るようなまねだけはしないでくれと。わたしは言った。わたしは言った。

早朝の苦悩。心の出血。入浴してから少しだけ食事をする。わたしの早朝の苦悩は、光を求めすぎるわたしの感じやすさに対して与えられる、光量の乏しさから来る感受性の明晰さである。緯度の高いアリファクスの夜は、夢から開放された光が徐々にその領分を広げてゆくようにゆるやかに明ける。この永く続く早朝の時間にわたしの感受性は明晰さをまし、わたしを困らせる。わたしはながながしい夜の時間のなかで、光に対する癒しがたい希求とともに、夜が明ける瞬間を待つほうが相応しいのだろうか。あるいは今まさに暮れようとしている夕刻の時間のなかで、不可能なものに向けてのい

ちじるしい希求とともに、翳りをます光に静止を呼びかけるほうが相応しいのだろうか。少しずつ明るみを増してゆく早朝の時間はわたしに苦悩を与える。肌を射す冷氣とともに展かれるこの時間は、狂気に落ちた人に突然正気を取り戻させるかのように、わたしの感受性に明晰さを与え、しかしながらこの明晰さがわたしに苦悩を与える。わたしの心が出血する。昂ぶりもなく、傲りもなく、明るみをます光と明晰さのなかで、わたしの心が出血する。わたしの感受性はこの出血の始まりから終わりまでを、その刻々の移ろいを、信じ難い明晰さのなかで精確に捉え、鮮明に描写する。ある写真的な苦悩。

ああ。アルベールよアルベール。愛しているわ。わたしはあなたを愛している。わたしはあなたがわたしに語ってくれた愛の言葉のすべてを覚えている。あなたが約束してくれた愛の誓いをわたしはひとつとして忘れない。あの日あなたがわたしに誓ってくださったように、わたしはフランスの辺境の島であなたを待った。あなたの約束を信じてわたしは待った。最愛の人が馬に乗ってガンジーの浜辺にあらわれるであろう日を、指折りかぞえてわたしは待った。まるで愛の懲役を科せられた受刑者のようにわたしは待った。フランスの僻遠の地に追放されたお父さまのかたわらでわたしは待った。遠く西に

展けるガンジーの浜辺で、わたしは寄せてはかえす波のひびきにあなたの声を聞いた。花咲く罌粟の野面をわたる潮のにおいにあなたの肌の匂いを聞いた。雨が上がって鳴くひばりの声にわたしはおまえの愛の誓いを聞いた。ああアルベールよアルベール。今もこうして胸に手をあてていると、わたしの手はおまえの愛したわたしの胸の弾みの奥に、わたしの愛の柔らかな拍動を聞く。おまえの愛したわたしの胸は、わたしの指におまえの愛の息づかいを聞き、やさしく肌を粟立てる。わたしの肌に触れるわたしの手にすらおまえの愛の残像が匂い立つ。ああアルベールよアルベール。わたしはあなたを愛している。

トライアル版でご覧いただけるのはここまでです

この誰もが知る恋の物語、あるいは恋という誰もが知るドラマの核心部にある劇的なエッセンスを百の詩篇のもとに収めたカラス・センクエイの『ADELE』。あまりにも明晰、あまりにも繊細、あまりにも残酷、そしてあまりにも美しいこの書物に限っては、読者が誘惑され、耽溺することは少しも罪悪ではない。音楽に溢れ、色彩に溢れ、映像の美しさに溢れた贅沢な作品。しかしながら、読むことの快楽はそれらにもましてわれわれを魅惑する。本PDF版に加え、映像と音響に溢れたニューメディア・プロダクションとしてお届けするカラス・センクエイの数の本『CALLAS CENQUEI FEMMES #1 ADELE』。CD版・ダウンロード版、好評発売中。

- [ご購入いただく製品の案内](#)
- [ご購入のお申込み](#)
- [製品カタログのダウンロード](#)